

奨学金の受給要因の分析

小林雅之 (放送大学)

1. はじめに

奨学金の受給がいかなる基準で行われているか、その結果誰が奨学金を受けているか、また奨学金が進学の意思決定にどの程度の影響を与えているか、といった一連の問題は、きわめて政策的な課題である。しかし、日本ではこうした問題に対して、十分な研究がなされているとはいえない。この点、奨学金研究に膨大な蓄積を持つアメリカの状況と きわめて対象をなしている。本発表では、まずアメリカの奨学金研究をレビューする。次にこれと比較して日本での状況について検討する。さらに、これらに基づき、「高校生将来調査」と「学生生活調査」の2つの調査データによって奨学金の受給を規定する要因を分析し、誰が奨学金の受給者かを明らかにする。これらによって学費負担や奨学金の配分基準に対する示唆を与えることが本発表の最終目的である。なお本発表は日本教育社会学会第41回大会課題研究「教育機会における公正問題」のフォローアップである。

2. アメリカにおける奨学金研究の興隆とその背景

2.1 奨学金研究の展開

アメリカでは教育需要や学費や奨学金に関して様々な研究が蓄積されてきた。これらの研究から奨学金に限定してみた場合、次のような問題がみられる。

(1) 中所得者層の進学率の減少に奨学金は効果的か

中所得者層の負担増からこの層の進学率が減少しているという主張がある。これに対して、カーター政権時の1978年に中間所得層学生援助法(Middle Income Student Assistance Act)が制定された。この法に基づく施策の有効性の検討が1つの焦点となっている。

(2) 奨学金は低所得者層やマイノリティの進学に効果的か

これに関しても様々な研究がみられる。所得階層別進学率はかなり変化している。このうち奨学金の効果はあったのかどうか問題とされたのである。

(3) ローンか奨学金か

学生に援助を与える形態として大きく分ければ給付(奨学金)と貸与(ローン)の2種類がある。1980年代には給付から貸与への大きな以降がみられた。この選択に関しても大きな争点となっている。

(4) 奨学金は教育機関の行動にどのような影響を与えるか。

奨学金の増加は学費を上げるか? 質の高い学生の確保か? こうした教育需要ではなく、教育の供給側の研究は従来あまりなされていない。近年研究の焦点として関心が高まっている。

(5) 独立学生やproprietary schoolの学生への奨学金の増加

これらは奨学金の分配に疑問を投げかけた。アメリカの奨学金の分配基準は奨学(need)によるものが多い。このため、親と別世帯を営む独立学生は所得が低いいため、奨学金を受けやすい。また、従来の伝統的な高等教育機関に対して、きわめて職業志向の高いproprietary school(日本の専門学校に近い学校)にこうした学生が多い。このためこの学校の在学者で奨学金の受給率が高くなり、機関ごとに格差が生じているという問題が起こっている。

(6) 奨学(need based)か育英(merit based)か

奨学(need based)か育英(merit based)かの問題は平等と効率のトレードオフの問題と平行である。すなわち、need basedは平等重視であるのに対して、merit basedは効率重視の原則であるといえる。

この育英(merit based)か奨学(need based)かの問題は奨学金だけの問題ではなく学費負担の問題とも深く関わっている。エリート大学に進学した人間は様々な奨学金を受けやすいし、何も奨学金を受けなくても間接的に援助を受けていることになる。彼らがそれだけの援助を受けることは、将来優秀な人材として社会的に貢献することで社会的なリターンがあると考えられているからである。さらに、彼らは優秀な学生が集まるという外部効果からも恩恵を受けている。McPherson & Shapiro (1991)は、このようなエリート教育機関の優位性を考慮すると、merit aidはより非エリートの機関が実施すべきであるという。

また、Baum & Schwartz (1988)は、merit-based aidでは低所得者の奨学金受給機会を減少させるとともに、優秀な学生を奪いあうゼロ・サムゲームになり、全体の進学率はむしろ低下すると主張する。しかし、James (1988)はこれには疑問があるという。

さらに、Jamesの次のような指摘も研究を考える際に、示唆に富む。すなわち、needについて考える際に

重要なことは、学生や家族がコントロールできる要因と選択できる要因を分けることである。たとえば、資産は過去の消費／貯蓄の決定によるし、現在の所得も労働／余暇選択による。しかし、マイノリティであることは選択ではない。

つまり、政策を考える際には政策的にコントロールできる変数に着目するように、家族や個人がコントロールできない変数に対して、援助を行うことが、公正の原則にかなうというのである。しかし、家計の所得をneedの基準に加えるかどうかは、この原則からは判断が難しくなってしまう。

このように育英か奨学かについて研究者の間でも見解が分かれ、論争に決着はついていない。ここで重要なことは、育英か奨学かの二者択一ではない。このような論争を通じ、研究が蓄積され、成果があがっていることが重要なのである。

2.2 奨学金の進学行動に与える影響に関する研究

奨学金が進学に与える影響に関しては先にふれたEconomics of Education Review誌の研究以外にも多くの研究がある。例えば、Leslie and Brinkman (1988)は、過去124の奨学金研究をレビュー、メタ分析を行っている。ここでは奨学金研究を方法論によって次の3つに分けている。

- (1) 計量経済学的分析
- (2) 学生意見調査
- (3) 参加率研究

これらの研究から、進学に及ぼす奨学金の効果については次のようにまとめることができる。

- (1) 奨学金は低所得者層に重点的に分配されるために、学費操作よりも進学率への効果が大きい。
- (2) 学力低位の者には効果が薄い。高学力者は奨学金がなくても進学する。進学率を左右するのは限界層である。
- (3) 低所得者層やそれらの多い非選抜的、低費用の高等教育機関で効果がある。
- (4) 奨学金は中高所得者層には単なる補助、贈与になっている。奨学金の所得再配分機能への疑問が生まれている。

このように先にみたEconomics of Education Review誌と共通の問題が指摘されている。しかし、奨学金研究は盛んに行われているが、その分析結果は必ずしも一致しているわけではない。その理由の1つは奨学金の効果分析にともなう理論的あるいは技術的な問題にある。これについては次の項で改めて考えてみたい。

2.3 理論的な問題点

こうしてアメリカにおける奨学金研究は分厚い蓄積

をもっているが、分析の理論的な問題点を完全に解決できていない。奨学金は学生の教育機関への応募、教育機関からの入学許可（合格）、実際の入学、奨学金への応募、奨学金の受給の決定といった一連の決定過程をへて最終的に受給者が決められる。こうした複雑さのために、奨学金の受給過程のモデル化や実際の受給要因の計測は容易ではない。最も重要な問題点は次の2つである。

(1) ほとんどの奨学金は進学決定後に与えられるので、進学決定時に及ぼす影響は小さいと考えられる。この問題点は、進学決定の際に、期待される奨学金を考慮したと読み直す(ex postをex ante)とすることで一応回避できる。

(2) 奨学金は進学した者だけ捉えることができる。非進学者がもし進学したとしたら、奨学金が与えられたかどうか不明である。このため測定は進学者だけのデータになり、バイアスを生じることになる。これはsample selection biasあるいはtruncated dataの問題といわれる。この推定パラメータのバイアスを修正するために、推計式になんらかの工夫をこらす必要がある。主な修正の試みをあげると次のようになる。

(1) Tobit Model

Schwarz (1980) はTobit Modelによりtruncated dataを処理する。

(2) Conditional Joint Random Utility Model

Kohn, Manski & Mundel (1976), Fuller et al. (1982), Venti & Wise (1983), Manski & Wise (1983)らは条件つきプロビットモデルにより、奨学金を受けて進学する確率と奨学金を受けずに進学する確率、及び非進学確率を同時に推計することでバイアスを処理している。

(3) Hazard Ratio

Blakemore and Low (1983)は第1段階では進学決定と奨学金決定を分けて推計式をたて、次にこの奨学金の推計値をもう一度進学確率の推計式に加え、さらにhazard ratio (Heckman (1981))を導入してバイアスを除去する。この推計ではこれまでの研究は奨学金のために所得弾性値を低く推定していたと主張する。

このように様々な試みがなされているが、いずれの研究も理論的な問題点を完全に克服できたわけではない。しかし、それがまた、次の研究を促すというダイナミクスをみのがしてはならないであろう。

3. 日本での学費・奨学金研究のレビュー

4. 奨学金の受給基準の分析

5. まとめ